

越境するエルサルバドル人

私は2002～2004年にかけての2年半、在エルサルバドル大使館に専門調査員として勤務しました。つたないスペイン語でも何とかやっていけたのは、仕事の内外で接するエルサルバドル人のほとんどは、かなり流暢に英語を話すことが出来たからです。特にまだ耳が慣れないうちは、相手が気をつかって「英語に切り替えようか?」と言ってくれたことに何度も救われました。

そんなある日、現地紙の社会面を開くと、冬のワシントンDCで、ニット帽にウインドブレーカー姿で雪かきをするエルサルバドル人の一群に取材した記事が目にとまりました。米国的主要都市は雪が降ると、貧しい移民労働者が除雪作業に従事するのだと知つて、私は驚きました。雪の降らないエルサルバドルから、米国へ行って雪かきをするのかと。一方、富裕層は留学や商用以外にも、結婚式を挙げたり、出産したり、病気で医者に手術をしてもらったりするために、しばしば米国を訪れます。別の新聞の社交欄には、マイアミの高級ホテルのバンケットルームで結婚式を挙げる名家出身の若い二人と、彼らを祝福するためにエルサルバドルから駆け付けた親戚・友人らの華やかなファッショナップが掲載されていました。この国はあらゆる社会階層が、米国との間を活発に往来しているのだと理解しました。

中米ではグアテマラ、ホンジュラス、エルサルバドルの北部3カ国が米国への移民送出国として知られていますが、同じ人口規模を持つ隣国ホンジュラスの在米100万人に対して、在米エルサルバドル人の数は250万人に上ると言われます。米国のシンクタンクが実施した調査によると、同国からの送金を受け取っているラテンアメリカ諸国の成人人口の割合は、エルサルバドル28%、グアテマラ24%、メキシコ18%、ホンジュラス16%、エ



クアドル14%の順に高いそうです。エルサルバドルは国民の約4人に1人が米国で働き、同じく4人に1人が米国にいる家族やパートナーからの送金を受け取っていることになります。このいわゆる「家族送金」による消費を当て込んだショッピングモールの開発が進む一方、冷凍プチサや、イグアナ・スープの缶詰など、在米エルサルバドル人のニッチ市場を当て込んだ商品開発と対米輸出の意欲も旺盛でした。輸出用ロココのフレッシュパックを製造する工場の記者発表会に呼ばれたこともあります。

赴任中、出張でサンサルバドルからロサンゼルスへ向かう飛行機の中で、たまたま隣に座ったエルサルバドル人の青年から身の上話を聞いたことがあります。彼はサウスカロライナ州の自動車工場でカーナビを車に取り付ける仕事をしていて、エルサルバドルに一時帰国後、再渡米するところでした。年の頃は当時の私と同じ20代前半くらい、その数年前に9人の兄弟姉妹で相談のうえ、5人が米国に出稼ぎに行き、4人はエルサルバドルに残って両親の面倒を見ることにしたと言います。出稼ぎ組の5人は一緒に徒歩やチキンバスなどを乗り継いで、陸路でエルサルバドルからグアテマラ、メキシコを抜けてアメリカ合衆国を目指しました。過酷な旅は2ヶ月以上に及び、道半ばで兄弟の1人を亡くすという悲劇にも見舞われました。初対面の他人には言えないような苦労や裏事情も色々あったことでしょう。「でも、そうやって人生を変えたんだ」と誇らしげな表情を覗かせたのを、今でも思い出すことがあります。

離任後は5年に1度くらいのペースで、おもに政治経済分野の調査研究目的でエルサルバドルを訪れていますが、妹が住んでいるロサンゼルスでもエルサルバドルを感じことがあります。たとえば、ダウンタウンで観光客にも人気のグランド・セントラル・マーケットは、「世界のB級グルメのトレンド発信地」として知られていますが、その中でププサの店は高い人気を誇っています。



また、先日、ロサンゼルスに出張した日本人の知人から、「宿泊しているホテルの周辺がエルサルバドルの飲食店だらけで驚いている。ププサは食べたけど、せっかくの機会なので他にも何か挑戦したい。どんな料理がおすすめかな?」という相談のメールを貰いました。どうやら近年、コリアタウンに隣接した通り沿いに「エルサルバドル回廊 (El Salvador Corridor)」と呼ばれる屋台村のような一画が出現したようです。LAのコリアタウンはもともとメキシコのオアハカ州出身者が集まる場所としても知られていて、「全米一のメキシコ料理店」に選ばれたこともある人気レストラン「ゲラゲツァ (Guelaguetza)」もコリアタウンにあります。メキシコ・中米コミュニティのほかにも、南アジア系の「リトル・バングラデシュ」が成立するなど、コリアタウンおよびその周辺は年々巨大化、多民族化しているようですね。先述の知人には、魚介のスープ「マリスカーダ」と、お菓子の「アルファホーレス」をすすめました。残念ながらアルファホーレスは見つからなかったようですが、マリスカーダは美味しく食べてくれたようです。「食は思い出」、私もマリスカーダで有名な

サンミゲル市のレストラン「ラ・ペマ (La Pema)」で食べたのを懐かしく思い出しました。確か「東部地域開発マスターplan」を策定する JICA 開発調査の関係者に同行したときでした。

トランプ米大統領による「国境の壁」建設に象徴される移民取締り強化、そして昨今の世界的な新型コロナウィルス禍による移動・出入国制限と、越境者に厳しい状況が続いているのを見ると、エルサルバドルのことを思い出さずにいられません。国内産業が脆弱な同国の経済がますます停滞することは避けられないのでしょうか。来年2月に予定されている国會議員・市長選挙にどのような影響を与えるのでしょうか。ウィルスの流行が一刻も早く終息して、現地調査に行ける見通しが立つことを願っています。(2020.04.09)



Bill Esparza. 2019. "LA's Salvadoran Street Food Market Is a Central American Culinary Wonderland." *Eater Los Angeles*, Aug. 7.

<https://la.eater.com/2019/8/7/20700559/salvadoran-street-food-market-koreatown-los-angeles>

Inter-American Dialogue. 2004. *All in the Family: Latin America's Most Important International Financial Flow*. Task Force on Remittances.

笛田千容（ふえた ちひろ）氏

2002～2004 年まで在エルサルバドル日本大使館に勤務。松下幸之助国際スカラシップによるグアテマラ派遣（2010～2011 年）、政策研究大学院大学アシスタント・リサーチャーなどを経て現在、駒澤大学講師。